



国際協力で大切なのは思いやりの気持ちなんです。

自分の持っている技術で途上国の役に立ちたい。そんな青年たちを募った青年海外協力隊は昭和四十年から現在まで約一万二千人を五十三カ国に派遣。熊本からも毎年二十人前後の青年たちが出掛けていき、帰国後もボランティアで地道な活動を続けています。国際協力とは？ 県青年海外協力協会会長の原田三男さんに聞きます。



原田三男さん

●プロフィール
植木町出身。1953年生まれ。27才から3年間、青年海外協力隊員としてバングラデシュへ。帰国後は県青年海外協力協会に加入し、平成3年に5代目会長に就任。夫人も同じ協力隊のOG。

●肌で感じてほしい国際協力

十月三日、国際協力の現状と開発途上国の文化を理解してもらおうと熊本市の安田フォーラムで記念シンポジウムと地球食へ歩きマップが開催されました。一番人気は青年海外協力隊OB・OGが作ったアジア・アフリカ・中南米などの料理の数々。「身近に感じてもらえれば」。民族衣装をまとった協力隊OGもムードを盛り上げています。

●小学生たちが援助米を作った

昨年、県青年海外協力協会は長陽村の米農家と立野小学校に休耕田での援助

米の作付けを呼び掛け、二十三丁を玄米粉に加工してザンビア共和国へ送りました。六月、ザンビアの駐日大使がお礼を述べに同村を訪れ、田植えから収穫までを手伝った小学生たちを感激させたようです。「国際理解は小さいうちから体験学習することによって深まるのでは」と原田さん。この援助米、来年はマラウイに送られることになっています。

●何かせずにはいられない

原田三男さんは、二十七歳の時、青年海外協力隊員として、バングラデシュへ行き、野菜栽培の指導に当たりました。応募動機は「ただ海外に行ってみたかっただけ」の原田さんでしたが、帰国後は、食糧援助事業をはじめ



バングラデシュの農業改良普及員養成所の女生徒たちと

国からの技術研修生との交流や隊員の帰国報告会を開催するなどの活動を行っています。「飢えに苦しむ人々を目の当たりにすれば誰だって『何かせずにはいられない』という気になるんです」と原田さん。隊員の中には帰国後、国際協力のエキスパートとして再び行く人もいます。でも、途上国へ原田さんを引きつけるのは「同情」ばかりではありません。「人間味があつて楽しい毎日でした。だから同情というのではなく、互いを思いやる気持ちなんです」。海外からの技術研修生をサマーキャンプに招待するのも、お世話になったお礼の気持ちから。「バングラデシュが新聞やテレビに出ると知らないうちに見ているんです」。原田さんは遠い地球家族に思いを馳せているようです。



おいしいね/各国の民族料理に舌鼓

県立美術館収蔵品から「道東の四季・春」舟越保武作 高さ二三〇釐



二の丸の美術館を訪れると、木々の緑と美術館のレンガの作り出す空間に、この《道東の四季・春》が迎えてくれる。美術館前庭の檣の枝をゆらさずさわやかな風に向かって立つ長身の若い女性。わずかな顔の傾きと少し左足をひいた姿勢が、シンメトリーな構成に変化を与え、舟越彫刻独特の洗練された気高さが印象的である。両腕の優美な動きと指先の自然で神経の行き届いた形や端正なあどけない顔に気を取られて見ていると、意外に豊かな肉体に気づきはっとさせられる。

舟越保武は一九二二年岩手県生まれ。長崎二十六殉教者記念像や大理石による究極の理想化に向かう女性像などで知られているわが国を代表する彫刻家である。

信仰と詩心に裏付けされた芸術性。静謐、敬虔、あるいは深い宗教性などという言葉で形容される舟越保武彫刻の一端を垣間見る作品である。

(学芸課主幹 田代晃三)